想い出の歴任校

(焼失後の新校舎)**昭和３８年**４月、新卒教師として赴任した風連中学校は、正しくその後の３８年間の教師生活の原点として、多くの指針を与えてくれた。翌年の校舎焼失は、悲しくつらい出来事ではあったが、生徒も教師も無から有を生み出す連帯感の大切さと、「窮すれば通じる」の人間のもつ「底力」を痛切に感じた学校であった。

昭和４３年４月、神楽町が旭川に移管された年度に神楽中学校に赴任・・・。個性的で、熱意に溢れた先生たちと朝から夜まで、生徒指導に駆け回った。市内の学校に追いつけ追い越せの意気に燃え、「学校は教師によって変わる」ことを実感できた。三度の卒業生を出したが、それぞれで仲人をさせてもらった想い出の学校。(懐かしの旧校舎)

(木造教室もあった旧校舎）**昭和５１年**４月、前日まで聖園中だと言われていたのに、光陽中学校に転勤。教師としては、子供や親との関わりでは充実した日常だった。しかし、マンモス校で多くの教師と接する中で、教師の資質とは・・？を考える苦悩の時期でもあった。行動を通して発言に責任を持つ教師でありたい、「有言実行」の教師でありたいと常に志向していたように思う。

昭和５９年４月、新設校としてスタートした東明中学校へ請われて行ったが、建て前の教育論が罷り通る人間関係に苛立ちを感じた。心から信頼できる人との出会いがあった反面、管理職や行政におもねる日常の教育活動に逆行する人間との出会いも・・・。そんな中、生徒が１名不足による過員問題の発生。管理職の対応も含め、窮地に陥った時の人間模様を体験した。(増築部を残している校舎)

(新しくなった校舎)**昭和６０年**６月１７日、９か月の約束で過員による東光中学校への転出。学級の生徒や多くの先生たちに実情を隠しての毎日は、針の筵の上にいるようだった。迷いに迷って３月、亡き堤校長に相談したところ、「残ってほしいが、あんたの気持ちを大事にしたい！」と言われ、涙が出た。組織間での約束を履行するのが筋と考え、東明へ戻ることにした。東光の子供を裏切ったとの思いが、心の痛みとして今も残る。

昭和６１年４月、東明中学校へ。戻ってみて、管理職は約束を履行するよりも、過員の処理をした時点で一件落着と考えていたと理解した。また、同僚の中にも快く思わない者もいることを感じた。辛かったが、志を同じくする先生たちと生徒に関わることに全力を傾注した。外部にばかり目配り気配り怠りなく、内部の後始末や尻拭いを気にしない先輩との確執はあったが、手間隙を掛けながら文武に秀でた学校づくりができたと思っている。(雪の中の校舎)

(慌しく過ぎた神居中学校）**平成４年**４月、神居中学校へ。全道学校図書館研究大会を翌年に控え、事務局長の立場でもあったので初めて人事への希望を出し、当時の本田校長(神居）には我儘を聞いていただいた。大会は盛会裡に終了し、授業や研究発表に取り組んだ先生たちの努力に感謝した。また、５０過ぎて初めて副担任となったが、改めて担任の苦労を実感した。

平成６年４月、期待していなかった教頭職で、江丹別中学校へ。なったからには、生徒のために一生懸命になっている先生を支援できる管理職になろうと、決意を新たにした。生徒も父母も全員家族のような小中併置校の生活で、自然や地域の人情に深く関われた時だった。また、佐藤博先生からご指導いただいたパソコンの技術は、仕事をする上での大いなる戦力となった。心から感謝をしているところです。(二十五名の小中学生と過ごした江丹別小中学校）

(終の棲家となった愛宕中学校)　**平成８年**４月、委員会の粋な計らい？で、最も一緒になりたくなかった校長のいる愛宕中学校へ。十周年記念に関わる諸事業、全道道徳研究大会等、旗揚げや安請け合いだけして具体策なし。道徳の権威を自認していたようだが、相変わらず人に尻拭いさせる癖は同じだなと感じた。しかし、バイタリティー溢れ、明るく活動的な先生たちには教えられることが多かった。

平成１３年４月、３８年間の教職生活を終えて、新たに「時間講師」としてスタートした旭川大学高校へ。週６時間の授業ではあるが、いい加減には勤めたくない。現職時には使えなかった佐藤博先生から伝授したパソコンの技術を、教科指導の中で心置きなく活用してみたいと考えている。教師の原点に立ち戻れたことを、うれしく感じている。(新たな学びを求めての旭大高）

(教え子の口利きで学んだ西高)　**平成14年度**、神楽時代の教え子＝斉藤薫君の世話で、前年に引き続き三年生二学級で「古典Ｉ」と「選択古典講読」の授業をさせてもらう。生徒たちに約束した「教科通信」の発行は、二教科とも１２０㌫の達成度であった。実体験との違いを感じながらも、若者の純な感性を戸惑いと力強をもって感じさせられた。

平成１５年４月から、再度勤めることになった。１．２年の体育コース、３年生の３学年に跨っての１２時間。教科通信の発行は忙しくなったが、１３年度の経験が随分と生かされていると思う。生徒たちの扱いも、勘所が分かってきたようにも思う。
（余裕を持っての指導ができるようになった旭大高校）

平成１６年度は、「シルバー人材センター」の事業の一つとして実施されている「学習塾」へ。生徒は多い時で四人、少ない時は一人という内容。交通費も出ない状態で、どこかでやらなければならないと考えていた「ボランティア」をしていると思いながら通っている。だからといって、手抜きはしていない。「学び通信　牛歩の如く」を発行しながら、夜間中学の教師になったような感覚で勉強している。

平成１７年度は、再々度の旭大高での時間講師をすることとなった。一年生の時に受け持っていた体育科の一学級を持つことになり、懐かしい限りであった。生徒たちも喜んで迎え入れてくれている様子で、今回は受け持たないもう一つの体育科の生徒たちからは、「どうして来てくれないの？」と、話半分としてもうれしい言葉を掛けてもらい、教師としての喜びを感じさせてもらった。同じ教科書を使っているのに、副教材を使っている学級と使っていない学級があり、スタート時で少々の戸惑いがあった。個性的な指導は同じ教科であっても当然だし、望ましいことではあるが、同学年・同一教科書であれば副教材ぐらいは統一してほしいものである。ともかく、小生としては「学び通信　牛歩の如く」を通して、生徒たちと少しでも充実できる時間が過ごせるよう、共学に努めたいと思っている次第である。

平成18・19年は、正に「サンデー毎日」の毎日を過ごしていた。**平成20年**も夏が近づいた6月になって、教育委員会から愛宕中学校の初任者研修時の時間講師としてどうか・・・との依頼を受けた。終の棲家となった学校でもあり、身体や心を活動させることで、生徒たちにまだまだ指導できることがあるのでは・・・と考え、6月から16日間(11月まで)にわたって、一年生の「書写」や二年生の「国語」を中心に、生徒たちとの楽しい時間を過ごすことが出来た。11月26日、最後の授業が終わって教室を出た時、一人の男子生徒から。「木村先生、短い間でしたが、数々の授業ありがとうございました。先生の授業は、大変貴重なものでした。今日で最後というのは悲しいですが、今後もお元気でお過ごし下さい。また、いつかどこかで会えるといいです。本当にありがとうございました。」と、記されていた手帳に書かれたメモ書きをもらった。何時間かしか接しなかった生徒からのメッセージで、新たな気力をもらった思いであった。

まだ愛宕中学校に通っていた**平成20年**10 月の初旬、教育委員会から電話が入った。北都商業高校で一年生の国語担任が急遽入院となったので、復帰するまでの期間お願いできないだろうか・・・とのことであった。11月末までは愛宕に行かねばならなかったのだが、その旨は話してあるので調整できるから・・・という。それであれば・・・と、週12時間の時間講師を引き受けた。当初は年内ということだったが、1月まで延長、更に現在は2月いっぱいの再延長となっている。多分、3月までの勤務となるであろう。退職後、5年間にわたり三つの高校の生徒たちと関わってきたが、生徒たちの日常生活を通しても世の中が大きく変わりつつあることが実感できる。プラスマイナス両極の変化があるが、目線を低くして誠意を持って真剣に接することで大抵のことは解決できると思っている。残されている生徒たちとの時間は少ないが、自分の持っている全てを出し切って、一期一会の出会いを大切にしたいと考えている次第である。

平成21年度

5月1日から、永山中学校一年生二学級の国語担当の時間講師として出勤している。三月までは高校一年生の生徒達と過ごしていて、その二ケ月後に、未だ小学生の雰囲気もある中学一年生との接触でのギャップは大きく、この時期の人間の成長の著しさを改めて実感させられたものである。これまでの8年間の時間講師としての取り組みの中でも、「俳句作り」や「短歌作り」は継続してきた。今年も7月初旬に、学校から3分ほどの公園での「短歌作り」として実践することができた。そして、新たな試みとして生徒自作の短歌を書

写と連動させ、半紙作品としてまとめた。それを、学校祭での廊下掲示として保護者に鑑賞してもらったが、かつて実践した修学旅行後の短歌による色紙作りの変形として、生徒達と一緒に有意義な取り組みができたと思っている。▼生徒たちは、対人関係を軸に様々な問題を抱えながら登校しているのであろうが、授業の中では真面目に取り組む者が報われ、学習活動を乱す者は成績の良し悪しに関係なく厳しく指導を受けるという対応は、生徒達からも受け入れられ、歓迎されていると感じる。年齢差に関係なく、学びを通して成長し合う人間同士の絆を大切に、残された時間を楽しく過ごしたいと考えている

平成22年度

４月１２日、４５年余の歴史を刻んできた北都商業高校への時間講師の要請を受けて、初出勤した。小生の教職のスタートと同時期に開校した市立の高校として、旭川市民に愛され親しまれ、多くの人材を世に送り出してきた高校であるが、来年三月をもって閉校・・・。広々とした校舎に三年生のみ、120名余の生徒だけでの学校生活である。ただ、この生徒たちとは20年度の10月から5ヶ月、病気療養の国語の先生のピンチヒッターとしての接触があるので、全くといっていいほど違和感がない。一つの学校の幕引きに向けて、一時間一時間の授業を如何に充実させるかということに神経を注ぎながら、生徒たちと共に学習に取り組みたいと考えているところである。

平成25年度

本州からは「桜前線」の北上が伝えられてはいたが、北海道は、まだまだ遠い春の訪れを心待ちにしていた四月も下旬…。朝、カミさんが電話に出ていたが、やがて小生の電話ということで子機が回ってきた。「旭川商業高校の…」という切り出しで、時間講師の要請依頼の内容であった。新学期が始まってから二週間になろうとしている段階での要請であり、「何で…?!」との思いもあったが、古稀を過ぎた小生に連絡をくれたことには、素直にうれしく感じた。